



消えた街角…富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和33年新橋第一ホテルの辺り

かつて全国に知られた東京の繁華街といえば、東海道本線の新橋駅を振り出しに歩いて銀座京橋日本橋であった。その町名が示すように、ここが東京都中央区には、すべて江戸時代の埋立地である。堀川に囲まれ、どこへ行くにも橋を渡らなければならず、不便なようではあるが、この堀川を利用して生活物資商品が供給され、繁華街を形成していった。

新橋駅のそばにも、新橋、土橋、幸橋、蓬萊橋など多く、これらの端を渡って、銀ふらや築地、日比谷の観劇を楽しみ、伝統文化と西洋文化に触れたわけである。

この形は戦中まで続いたが、東京大空襲による灰燼処理の捨て場として、戦後、昭和二十三年から順次埋め立てられ、街の模様を一変した。また、営団地下鉄丸の内線が敷設され、昭和三十三年に西銀座駅、現在は統合して銀座駅となるのが開業すると、すっかり人の流れが変わり、有楽町が都民の関心を集めるようになった。その影響で、日比谷の興行街に客は増えたが、以前からの新橋で降り、写真のレンガ積み鉄道線路に沿って歩いた日比谷への客は絶えた。

戦後しばらく、撮影地点近くに焼け残った古い小さなビルがあった。それを、米軍に本省ビルを接收されて、分散業務を強いられた大蔵省が使用していた。その一階にレコードのコロンビアが同居していて、新聞社勤務時代にたびたび訪れたことがある。相手は、並木路子、岡本敦郎、鶴田六郎、藤山一郎といったスター歌手であった。この方々にベニア板で仕切った応接室で、リンゴ箱をはいだ板で補強したテーブルを挟み、リンゴ箱を椅子に、インタビュウにに応じてもらった思い出がある。

文 富岡畦草とみおが けいそう(大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員)



(平成15年3月5日 富岡畦草撮影)

上下2枚の写真の主演は間違いなくJR線下の煉瓦造りの橋であろう。連続アーチ型構造のこの橋はJR山手線、上野駅から浜松町駅まで続いており、関東大震災でも壊れることなく山手線を支えてきた。一方、都市型ビジネスホテルの老舗である「新橋第一ホテル」は、全面改築し「第一ホテル東京」として生まれ変わっている。

現存するものと、なくなってしまうもの。どこにでもある街の風景の一つと、いってしまえばそれまでだが、あらためて記録の目として、写真で残しておくことの意義を感じた。(文:渡辺邦博)